目が覚めた。おそらくは深夜。時間は確認しない。スマホを持たず、財布と鍵とウォークマンとイヤホンと単行本を入れた巾着袋を前ポケットに入れてアパートを出た。それはひたすらに突発的な行動だった。深夜の町を徘徊したくなった。

空はまだ暗闇で、星が瞬いている。吐く息は白く、空気が澄んでいる。マフラーに顔をうずめるも、耳は隠せず寒さに晒されたまま。我慢するほかなかった。

車も人もいない。

普段は生活に溢れる大通りが街灯に照らされるだけで生活音を発さない。地元は昼夜問わず静かだったし、大通りなんて呼べるものもなかったから新鮮だ。

大通りを歩く途中で角を曲がり、線路沿いの道に突き当たる。迷わず、線路脇の道を進む。段々と深夜の寒さに慣れ、耳の寒さも気にならなくなって来た頃、音が聞こえた。それは演奏の音だった。細やかな、ピアノの音だった。すぐ近くから聞こえているわけではないが、耳をすませばわずかに聞こえるくらいの距離があるようだった。

俺はその音を辿った。たどり着くまでに三つの曲が聞こえた。

一番目にジムノペディ。

二番目にアルハンブラ。

三番目に月の光。

趣味が合うとも、趣味がいいとも思った。ただいただけないのはすべて演奏を途中でやめてしまうことだった。言えるのであればあれば苦言のひとつも呈したい。

月の光の聞こえ初めに音の出所に着いた。そこは木々が多く伸び、遊具もベンチも充実した公園だった。こんなところでピアノ?と思ったが、タブレットの上で指が躍る様を見て、ああなるほど、と納得した。今時はそういうアプリもあるのだろう。

俺はベンチに座って本を読み始めた。

やがて演奏が止まったが、顔を上げずにそのまま読書を続けていると演奏も再開された。次は TakeFive が始まった。ローテンポにされたもので静かな夜によく合った。

俺は聞き入りながらも読書に集中した。最近というかこの一週間、ひさしぶりに忙しくしてもらったせいでほとんど読書に集中できなかったのもあって、非日常的な空間であるにも関わらずとても集中した。

「あの」

と声をかけられるまで目の前にピアノ奏者が来ていることに気付かないほどに。

「――――はい」

驚きと動揺は呑み込んだ。

「次、何がいいですか」

「じゃあ、ブルートレインを。ジョンコルトレーンの」

ピアノ奏者は快諾した。そして気付けば空は白んでいた。